

## 共同体と贈与をめぐる日本的思惟の深層

——宮沢賢治の場合——

岩野卓司

### 一 共同体

近年、資本主義が行き詰まりつつある。利潤の追求、自由競争、経済成長の神話が限界を迎えつつある今日、贈与による経済が見直されている。既に社会人類学者のモースは、『贈与論』の中で資本主義の是正を求めて、未開人の贈与の知恵を現代に活かそうとしたが<sup>①</sup>、この考え方は社会学や経済学の分野で近年取り上げられてきている。現代哲学の分野でも、例えばマリオンは「愛」や「間贈与性」の問題提起によって他者との関係の根幹において贈与を問題にしている<sup>②</sup>。贈与は経済のみならず共同体や共同性の新たな問いとも密接に関わっているのだ。

西欧の経済や共同体が遭遇している転換の時期に「日本的思惟」がどういう役割を果たすことができるのか。東日本大震災以降再び注目を集めている宮沢賢治の場合を考えながら、彼の思想が孕む可能性について問うてみたい。

一口に共同体といっても色々な角度から定義できる。ここでは哲学と宗教と関わり、ブランショやナンシーの共同体論やイタリアの共同体論に影響を与えているバタイユの定義を参考にしたい。彼によれば、西欧の共同体は常にモノセフル(単頭)志向である。宗教においてはキリスト教の「神」、社会においては「王」、家族においては「父」のような「頭」や「中心」による支配がそこにはあった。バタイユはファシズムとスターリニズムにその頂点を見る。ただ我々の知る限り、度合いは違うが、大統領制の民主主義にせよ、やはり「頭」や「中心」は存在している<sup>③</sup>。

宮沢賢治の思想には、「頭」や「中心」を求める西欧的な共同体とは異なる可能性があるのではないのか。ところで、賢治

の作品における共同体といえ、イーハトヴである。童話集『注文の多い料理店』の副題は、「イーハトヴ童話集」であった。イーハトヴとは何であろうか。賢治はこう述べている。「イーハトヴは一つの地名である。強て、その地点を求むるならばそれは、大小クラウスたちの耕してゐた、野原や、少女アリスガ<sup>アリスガ</sup>辿った鏡の国と同じ世界の中、テパ<sup>テパ</sup>ンタル砂漠の遙かな北東、イヴン<sup>イヴン</sup>王国の遠い東と考へられる。／実はこれは著者の心象中に、この様な状景をもつて実在した／ドリームランドとしての日本岩手県である。」イーハトヴは賢治が生活していた岩手県がモデルになっているが、それは「ドリームランド」としての「岩手県」である。それは心に浮かぶ空間であるから、どこにもないユートピアと言える。が、必ずしも理想郷ではない。「注文の多い料理店」や「鳥の北斗七星」には、残酷な情景もあり、不条理な現実の告発もある。賢治はこう続けている。「正しいものの種子を有し、その美しい発芽を待つものである。」<sup>(8)</sup>理想を孕んだ種子が、この童話の世界にはばらまかれていて、それが開花するのが、賢治の狙いである。そして、この世界は彼の心象風景であるが、「心の深部に於いて万人の共通」<sup>(9)</sup>なものである。イーハトヴは、理想の種子を孕んだ深層の共同体ないしは共同性なのである。

それでは、この共同体はどういうものであろうか。『注文の多い料理店』以外の作品も交えながら考えていこう。

まずは、賢治が入会した日蓮宗系の在家団体「国柱会」の田

中智学の思想に触れておこう。その対比において賢治の共同体の特色が明らかになると思われるからである。智学は「世界の統一」といった形で共同体の理想について語っている。日蓮の教えと天皇制を結びつけた彼は、『日本国体の研究』の中で神武天皇の言葉から「八紘一宇」のスローガンをつくり、「世界の統一」を正当化していくのだが、この統一は法華経の真理のもとでの道義的な統一であり、けっして「版図的な意味の統一」<sup>(7)</sup>ではない。智学には日本人が世界で最も優秀な民族だという「選民」思想がある。つまり、「おしなべて人類の中で、日本だけ特別の天職を有った国で、その国民は一種の使命を帯たた人民である」<sup>(8)</sup>。だから、統一の使命を担うのは日本という選ばれし国なのである。「本化宗学よりみたる日本国体」という論文で日蓮の「開目鈔」の文句「我日本の柱とならん」を解釈して、彼はこう言う。「日本といふものは世界の中心である。だから日本の柱になって居れば、それで世界の柱になるのだ。」<sup>(9)</sup>さらには身体<sup>(10)</sup>の比喩を使いながらこうも言う。「人間の身體の中心は頭が中心だ。〔中略〕首を切れば直ぐ死んでしまふ、即ち中心だ。この國だつて皇室が中心だ。その中心を喪つたらどうなる？そこで日本は世界の中心であるから、大聖人は『世界の柱とならん』といふべきところを『日本の柱』と言はれたのである。」「日本は世界統一のリーダーとしての「頭」であり「中心」なのだ。この日本の中心に居るのが、天皇である。天皇は天照大神らの皇祖につながるのみならず、法華経の真理を体現して

いる。その結果、天皇というローカルな存在が法華経を通して普遍的な存在として正当化されるのである。智学は国立戒壇にこだわったが、世界的な使命をもった日本の国家による戒壇を通して、世界の人々が法華経に帰依するのだ。その際、日本は「世界の中心の日本」<sup>(11)</sup>であり、天皇は「日本國の領有者ばかりでなく、世界人類の靈的長者」<sup>(12)</sup>になるという訳である。

これに対して、智学に影響を受けつつも、賢治が考えるイーハトヴの共同体では「頭」や「中心」が不在である。イーハトヴは「ドリームランドとしての日本岩手県」であるが、「テパインターナル砂漠の遙かな北東、イヴァン王国の遠い東」であり、岩手県は既にして夢の国としてコスモポリタンのイメージとなっている。しかも、イーハトヴ共同体の登場人物に関しては、日本人が中心を占めているとは言えない。もちろん童話の登場人物には、日本人もいる（例えば、「鹿踊りのはじまり」の嘉十や「なめとこ山の熊」の小十郎）。しかし、それだけではない。西洋の人を思わせる固有名詞の人物が主人公の場合もある（「セロ弾きのゴーシュ」のゴーシュや「銀河鉄道の夜」のジョバンニ）。中国の西域を彷彿させる者の場合もある（「雁の童子」の須利耶）。だから、イーハトヴの住人は特定の国民や民族に限定されないし、特定の国や民族を称揚しているものでもない。智学の「八紘一宇」の理想と異なり、そこには法華経の真理の実現のために選ばれた特権的な民族はいない。智学の思想で強調される日本や天皇という「中心」や「頭」はそこには見ら

れないのだ。この点で、ナシヨナリズムに無関心な賢治が構想する共同体は、アセファル（無頭）的と言えるのではないのだろうか。コスモポリタンである賢治は、エスペラント語を学び、その言葉で詩作すらしている。イーハトヴは、特定の国や国民が優位にたつような場所ではないのだ。

しかも人間もそこでは中心的な場所を占めてはいない。主人公が人間以外の場合も多くある。動物の場合（山猫やよだか）もあれば、植物の場合（ダアリア）もある。鉱物の場合（火山弾）もある。異界の者（ペンネンネンネン・ネネム）の場合もある。これらの者たちのうち、中心に位置する者はいない。彼らはヒエラルキーを形成するのではなく、脱中心的な形でそこに存在しているのではないのだろうか。こう述べると、童話はある寓意であり、人間の考えを子供のために動物などに仮託して述べたものだという反論があるかもしれない。確かに彼の文学は法華文学と呼ばれ、仏教の教訓を述べた作品もある。ただ、彼の作品はこういった作者の意図を超えた面があるのではないのだろうか。『注文の多い料理店』の序で、彼は述べている。「これらのわたしのおはなしは、みんな林や野はらや鉄道線路やらで、虹や月あかりからもらってきたのです」<sup>(13)</sup>。自然が彼に書くように要請し、ここに浮かぶがままに彼は書いた訳である。彼にとつて書くことは、彼の意図を超えたものをふくんでいる。動物や植物を描く場合も、人間の世界の寓意だけではなく、それを超えたものと関わっていると言えるであろう。

だから賢治の文学作品は、自然との共同作業と言える。例えば、オノマトペ（音喩）の多用は、単に彼の幼児性を示しているだけではなく、彼の自然との共同作業を表しているのではないだろうか。<sup>16</sup> イーハトヴでは、人間ですら「頭」や「中心」にならないのである。<sup>17</sup> この意味で、賢治の世界は徹底的にアセファールのと言える。

人間中心の発想をとらない彼はさらに、肉食を放棄して菜食主義の立場をとる。動物を食べることは、ある意味で共食いなのである。前世で人間であった動物を食べると彼は考えるからである。彼は「ピヂテリアン大祭」で、輪廻転生を繰り返すことで「我々のまはり生物はみな永い間の親子兄弟である」<sup>18</sup>とまで述べている。これは仏教の考えである。ただ、仏教の輪廻転生にはヒエラルキーがある。もちろん賢治の思想にも、ヒエラルキーがないわけではない。が、それは天界とこの世の間の差異である。例えば、「雁の童子」では、天の眷属が罪を犯して雁になり、その償いをして再び天に召されるといふ話がある。<sup>19</sup> 「二十六夜」では、鼻が肉食の罪からまた鼻に生まれ苦しみを味合わなければならぬ輪廻が語られている。<sup>20</sup> またこの「二十六夜」で、餓死しようとしていた人間の親子のために我が身を投げ捨てて食となり彼らの命を救った鼻が「疾翔大力」という菩薩になったことが語られている。<sup>21</sup> さらに、「よだかの星」で神がよだかの願いを聞き入れ天の星になる話、「銀河鉄道之夜」で自分の罪を悔いた蠍が天の星になって地上を照らしてい

る話が語られている。<sup>22</sup> このように天界と地上の世界とは明確な差があり、罪や功德を通して地上の者と天界の者は入れ替わりがある。しかし賢治の童話では、人間と動物の間にヒエラルキーが見いだせない。つまり、罪を犯すことで人間が動物に変身するという発想はそこにはないのだ。友に宛てた書簡で、彼は食卓にのぼる魚に同情し自分の前世が魚ではないかと推測するのだが、そこではかつて罪を犯して魚になったとは述べられていない。<sup>23</sup> 彼にとつて、人間と動物の間には大きな隔たりはないのではないのか。罪を通しての人間と動物の間のヒエラルキーはそこには存在しない。「ピヂテリアン大祭」にも、罪によつて動物になったという記述はない。動物と人間は「長い間の親子兄弟」であり、動物を食べるべきではないということが述べられるだけである。ここにあるのも、罪を通しての人間と動物のヒエラルキーではなく、両者の平等な関係ではないのだろうか。彼の考えは人間が「頭」という発想からはほど遠いのだ。とはいえ、犯した罪と贖罪という発想は賢治にも強く存在する。それは殺生をする者に如実に現れている。例えば、「貝の火」の主人公の子兔ホモイは、鳥を網に取つて食べようとしている狐の前に逃げだしたことで失明する。犯した罪は何らかの形で償わなければならないのだ。<sup>24</sup> 自然界の食物連鎖の場合も例外ではない。「よだか」は、「かぶとむし」や「たぐさんの羽虫」を食べ、「鷹に殺される」ことを嘆く。<sup>25</sup> 生物を食べる罪を犯した者は、これまた殺されることで償われる。因果応報という形

で、罪とその償いには差別はない。賢治の童話に自己犠牲の物語が幾つも登場するのも、彼自身の罪の償いに由来しているのではないのだろうか。彼はある時期から菜食主義になったが、それは肉食に罪悪を感じているからである。ここで重要なことは、罪と贖罪の関係の連鎖は、人間も動物も関係なく平等に続いていることなのだ。

そして、こういった脱中心的な関係は天台宗の本覚思想の影響のもとで賢治の思想の中で徹底されている。輪廻の苦しみから解脱した者について触れながら、友に彼はこう書いている。「二人成仏すれば三千大千世界山川草木虫魚禽獸みなともに成仏だ。」<sup>26)</sup>あらゆるものが「仏」に成りうる。人間だけでなく、動物さらには植物・土地にも「仏」は開かれており、ここに賢治の理想とする世界がある。彼の脱中心的な思想の背景には「草木国土悉皆成仏」の発想があるのだ。もともとインドの仏教では「有情」（意識をもつ）と「無情」（意識をもたない）の間に境界が設けられ、前者に属する人間と動物は食べてはいけないが、植物は後者に属するので食べてよいという菜食主義が唱えられていた。しかし、それが日本化するとこの境界は曖昧になってくる。かくして、成仏できる者の範囲は広がっていくのだ。人間と動物だけではなく、植物、鉱物までが「仏」に成りうる。ここにイーハトヴの共同体の理想があるのだろう。あらゆるものが、平等でヒエラルキーのない関係なのである。しかも、ここには「中心」も「頭」もない。日本化した仏教の影

響を受けた賢治の思想には、日本という中心もなければ、人間という中心もない。逆説なことだが、日本という中心が不在のこの空間にこそ、日本的思惟の深層が開けているのではないのだろうか。また、人間という中心が不在の世界に、人間の思惟の深層が隠れているのではないのだろうか。

## 二 贈 与

商取引による経済、貨幣による価値の決定、競争の社会に対して賢治は批判的である。

「なめとこ山の熊」では、猟師の小十郎は熊を鉄砲で仕留め、その毛皮と肝を荒物屋に売って暮らしているが、商売のうまい荒物屋に安く買ったたかかっている。賢治は不快な気持ちでその場面を書いていると告白している。商取引がなければ小十郎は暮らしていけないのだが、その経済システムに依存しているから、彼は情けない存在となっている。

「注文の多い料理店」の冒頭の場面では、二人の英国風の紳士が、死んでしまった猟犬に対して何の愛情も示さず、「二四〇〇円の損害」とか「二八〇〇円の損害」とか、金銭的な損失を嘆いている。ここでの価値は、命の尊厳ではなく、金銭的な交換における価値なのだ。貨幣による交換への賢治の嫌悪が読み取れるだろう。

競争社会の批判は、「洞熊学校を卒業した三人」に読みとれ。蜘蛛、なめくじ、狸は学校時代からライバル関係にあり、

誰が一番になるか競争していた。その結果、社会に出てから、他の者をだましてまでもトップになろうとする。彼らはそのために殺生も厭わない。「蜘蛛となめくじと狸」を改版したこの作品は、諷刺の枠を教育にまで向けられているが、彼らの競争は前作で述べられているように「地獄行きのマラソン競争」に他ならない。

このように賢治は商品経済、貨幣中心の発想、競争社会に対して批判的であるが、これらは資本主義が強い経済と社会を象徴しているのではないのだろうか。しかし、イーハトヴの共同体にはそれらにとって代わる原理がある。この原理が贈与なのである。

例えば、先ほどの「洞熊学校を卒業した三人」では、競争しあう三人の行動と対比的に「眼の碧い蜂」が花から蜜を集めたり巣作りをする様が語られている。多くの「眼の碧い蜂の仲間」が「小さな桃色の花」から「蜜や香料」をもらい、そのお返しに「黄金いろした円い花粉」を「ほかの花」に運んでいるのだ。花と蜂の関係は、お互いに他者を尊重しあっており、それは贈与交換という形で現れている。

「セロ弾きのゴーシュ」では、動物に曲の演奏を贈与することによって上達するという、利他的な贈与のもたらす恵みについて書かれている。楽団でも問題になるくらい下手なセロ弾きであるゴーシュが、夜中に一人で練習していると毎晩入れ替わりで動物たち（猫、くわくこう、狸の子、野ねずみの母子）が

やってくる。それぞれ理由から曲を弾いてくれと求める。ゴーシュはその願いに応じて曲を弾くが、不思議なことに彼は曲を弾くごとに上達し、一〇日後の演奏会では見事なアンコール曲を弾くぐらいいまになる。ゴーシュは動物たちに演奏を贈与することで、上達したのである。しかも、当初は傲慢だった彼の人柄も贈与を通して変わり、「くわくこう」につらくあたったことをわびている。

「狼森と兎森、盗森」では自然との贈与交換が主題になっている。小岩井農場の近くに四つの森があり、昔そこに入植した者たちは森の許可をえて家を建て畑をつくった。ところが、しばらくすると子供が四人いなくなったり、農具がなくなったり、粟が消えていたりする不思議なことが起こった。その度毎に、農民たちは森に粟餅を持って行き、そうすることで、農民たちと森の間に良好な関係が生まれたのだ。森が与えてくれる恵みに対する感謝の気持ちとして、粟餅を森にお返ししなければならぬのである。ここでは自然と人間との共生の基礎に贈与があることが示唆されている。

以上の例からも分かるように、共同体における他者との関係の基礎は、贈与にある。人間どうしであれ、動物どうしであれ、人間と動物の間であれ、人間と自然の間であれ、贈与が社会的な関係を産み出している。贈与は利害関係を越えて、他者への愛や尊重や感謝と結びついているのだ。イーハトヴの住人たちの共同性は贈与によって根拠づけられているし、それとも

に、贈与によって理想のほうに導かれている。賢治の作品が示してくる「日本の思惟の深層」は、人間、動物、植物、自然、自然との関係や他者との関係において恵みをもたらすものである。しかし、贈与の関係はこのように常に調和的なものなのであろうか。「狼森と笹森、盗森」では、最後の「盗森」の話で、粟を盗まれた農民たちが「盗森」に返すように求めたところ、逆に凄まれ身の危険を感じてしまう件がある。結果的にはうまく贈与交換は成立するのだが、ここに贈与のもたらす危険を感じるべきなのではないのか。しかも、贈与は対象を贈与するだけには収まらない。それは自己の贈与にまでエスカレートし、贈与者の自己犠牲となる場合がある。賢治の童話に犠牲というテーマが頻繁に出てくるのは、贈与との関係で捉えるべきであろう。モースは供儀と贈与の近さについて語っているが、賢治の場合も贈与と犠牲は密接な関係にあると言える。

賢治の童話では、「グスコープドリの伝記」は自己犠牲の物語である。ひどい冷害にあったイーハトヴでブドリの父と母は幼い子供たちに食料を残すために自害することから物語は始まり、立派に成長して技師となったブドリがイーハトヴを冷害の危機から救うために自分の命と引き換えに火山を爆発させた場

面で物語は終わる。<sup>35</sup>

こういった自己犠牲の精神は、平和な世界をつくるための祈りにも現れている。「鳥の北斗七星」では、軍人である鳥の大尉は「憎むことのできない敵を殺さないでいい」世界を願って、そのために自分の体が「何べん引き裂かれても」かまわないと祈っている。また、「銀河鉄道の夜」では、ジョバンニは親友のキャンネラに「みんなの幸のためならば僕の中からだんか百年も灼いてもかまわない」と告白する。多くの小さな虫の命をうばった蠍が死に瀕して罪を悔い「まことのみんなの幸」のために自分の命を捧げたいと神に祈り、暗闇を照らす火になったという話をふまえて、ジョバンニも自分を犠牲にしようとする。賢治には自己犠牲の願望がある。有名な詩「雨ニモマケズ」を読んでみてもそれは分かる。ただこの自己犠牲はただの奉仕活動では終わらない。死を要求するまでにエスカレートするのだ。そもそも、贈与の行為は財や物を与えたりすることであり、それは自分の所有物を犠牲にすることも有る。それがエスカレートすると自分の命までも犠牲にすることがある。賢治の場合もそれに近いのではないのだろうか。

賢治は、商品経済、貨幣中心の体制、競争社会に先立つ共同体を考えてきたが、その基盤をなすものは贈与であった。贈与を通しての他者との関係は、資本主義の利害関係に先立つ共同性なのである。しかし、この贈与は危険を孕んでいる。贈与は自己贈与という形で贈与交換の共同性を破壊し贈与する者の犠

性にまで至る可能性があるのだ。

日本的思维の深層は、日本に固有なものあるいは日本の固有性と見なされるものが希薄になったところで生起するのではないのだろうか。宮沢賢治の思想は、田中智学の思想と違い、日本や天皇が世界の中心を占めるのを避ける。さらには人間も万物の中心を占めてはいない。このことが、一神教が君臨し一人が政治的に支配する西欧的なモノセファルの思考に還元されない思想の可能性を示唆している。しかも、これは「草木国土悉皆成仏」という日本化した仏教のあり方と関係している。そして、賢治が提示する共同体の原理は贈与であり、西欧の思想が行き過ぎた資本主義の反省から注目している原理でもあるのだ。

- (1) M. Mauss, *Essai sur le don*, puf, 2012.
- (2) J.-L. Marion, *Êtant donné Essai d'une phénoménologie de la donation*, puf, 2005. 拙著『贈与の哲学 ジャン＝リュック・マリオンの思想』（明治大学出版会、二〇一四年）も参照された。
- (3) G. Bataille, *Œuvres complètes*, I, Gallimard, 1979, pp.442-558. バタユは西欧のモノセファルな共同体を批判し、アセファル（無頭の）共同体を提案する。それはニーチェの「神殺し」、革命による「王殺し」、フロイト流の「父殺し」を実践した共同体構想である。
- (4) 『宮沢賢治全集8』（以下「全集」と略記）ちくま文庫、一九八六年、六〇二―六〇三頁。
- (5) 同、六〇三頁。

- (6) 同、六〇三―六〇四頁。
- (7) 田中巴之助『日本国体の研究』天業民報社、一九三二年、六六〇頁。
- (8) 同、一六四頁。
- (9) 田中智学「本化宗学よりみたる日本国体」『師子王教義篇』師子王全集刊行会、一九三一年、四八頁。
- (10) 同、四九頁。
- (11) 『日本国体の研究』前掲、四八九頁。
- (12) 同、四九六頁。
- (13) 田中智学に関しては、西條義昌「日蓮主義の勃興と国体開頭——田中智学と本多日生の『日蓮主義』を中心に」、『シリーズ日蓮4 近代法の華運動と在家教団』春秋社、二〇一四年、一一九―一三八頁、末木文美士「国家・国体と日蓮思想1——田中智学を中心に」『シリーズ日蓮5 現代世界と日蓮』春秋社、二〇一五年、一一〇―一三〇頁を参照。
- (14) 『全集3』ちくま文庫、一九八六年、五七―五八四頁。
- (15) 『全集8』前掲、一五頁。
- (16) 矢野智司『贈与と交換の教育学——漱石、賢治の純粹贈与のレッスン』東京大学出版会、二〇〇八年、一一〇―一五〇頁。『動物絵本をめぐる冒険——動物・人間学のレッスン』勁草書房、二〇〇二年、四三―九九頁を参照。
- (17) そこでは「頭」や「中心」になろうとする者はその傲慢さから身を亡ぼす。「洞熊学校を卒業した三人」（『全集7』ちくま文庫、一九八五年、七〇―八八頁）を参照されたい。
- (18) 「ピナテリアン大祭」『全集6』ちくま文庫、一九八六年、一〇四頁。
- (19) 「雁の童子」『全集6』同、一五三頁。
- (20) 「二十六夜」『全集5』ちくま文庫、一九八六年、四三八―四三九頁。
- (21) 同、四三七―四三九頁。
- (22) 「よだかの星」同、九二―九三頁、「銀河鉄道の夜」『全集7』前掲、二八七頁。
- (23) 『全集9』ちくま文庫、一九九五年、九〇―九二頁。



- (24) 「貝の火」『全集5』前掲、四九―七七頁。
- (25) 「よだかの星」『全集5』同、八七頁。
- (26) 『全集9』前掲、九二頁。
- (27) 「なめとこ山の熊」『全集7』前掲、六五頁。
- (28) 「注文の多い料理店」『全集8』前掲、四〇―四一頁。
- (29) 「洞熊学校を卒業した三人」『全集7』前掲、七一頁。
- (30) 「蜘蛛となめくちと狸」『全集5』前掲、二五頁。
- (31) 「洞熊学校を卒業した三人」『全集7』前掲、七一頁。
- (32) 「セロ弾きのゴーシュ」『全集7』前掲、三六三―三八四頁。
- (33) 「狼森と兎森、盗森」『全集8』前掲、二九―三九頁。
- (34) 同、三八頁。「貝の火」でも、ひばりの命を救ったことでホモイに贈与された「貝の火」という玉が彼に不幸をもたらすことになる。ここにも贈与の危険が読みとれる（「貝の火」前掲、四九―七七頁）。
- (35) 「グスコープドリの伝記」『全集8』前掲、二三〇―二七一頁。
- (36) 「鳥の北斗七星」『全集8』前掲、六〇頁。
- (37) 「銀河鉄道の夜」『全集7』前掲、二九二頁。

(いわの・たくじ、思想史、明治大学教授)